



1



2



3

一般を対象とした鑑賞教育活動

アートモール・スクール・プロジェクト

2007年度～2009年度の鑑賞教育活動の中で特徴的に挙げられるものとして、2009年度より新たに実施した「アートモール・スクール・プロジェクト」がある。それは様々な参加体験型・参画交流型の作品に関する運営プログラムの集合体である。プロジェクト名は、美術館の下にいろいろな作品があり、それぞれに人が集い学ぶ様子をショッピングモールのようなイメージになぞらえたものである。

この事業を具体化した契機は、2009年度前半に開催した展覧会「愛についての100の物語」展(会期:4/29～8/30)である。本展では様々なアーティストにより、参加体験型・参画交流型の作品を複数同時に展開した。それら人の手を介して成立する作品、人と人の交流をもとにして生まれる作品5点について、作品に中心的に関わるメンバー(コアメンバー)の募集や運営を統括的に行うプロジェクトを立ち上げたのが本事業である。

本プロジェクトでは、各作品の展開は基本的に次のような構造を持つ。まず作品や作家を中心に継続的にコアメンバーが集うことで、核となる作品世界が生まれる。そこから来館者との交流を通じてさらに作品世界を拡大・継続させていく。本プロジェクトにおいて、各作品世界を通じたコアメンバーの体験は、作品の鑑賞活動という観点から非常に貴重なものといえる。メンバーは活動を通じてそれぞれの作品のより深い経験を持つ存在となり、彼らが美術館や地域にとっての将来的な財産となる。作品のテーマやメンバーの活動内容は様々であるが、こうした共通のイメージを基にコアメンバーの募集や作品の案内を行った。

2009年度、本プロジェクトとしては上記の展覧会で下記の5つの作品の運営を行い、またこのうち前から3作品については、9月以降も「コレクション展」に場を移して、年度間を通じてコアメンバーの活動が行われた。

みかん電鉄《みかん電鉄まるびい線開通》

作品は「電車ごっこ」のスタイルで展覧会場を巡り、作品との出会いや居合わせた人たちとのコミュニケーションを体験するもの。今回「みかん電鉄まるびい線開通」と題し、「みかん電鉄」社員となったメンバーが運転士や車掌となって、来館者を乗せて作品と出会う旅に出发した。¹

パトリック・トゥットフォコ《バイサークル》

ユニークな姿を持つ自転車型の本作品は、来館者が実際に館内で乗って周遊することができる。4台の作品のデモンストレーション運転や来館者への貸出などを行うメンバーとして「ドライブリーダー」を募集した。²

奥田久久《栽培から始める音楽》

ひょうたんを栽培して楽器を作りコンサートを開くまでの約1年間にわたるプロジェクト。奥田とともに結成した楽団「HOP(ひょうたんオーケストラプロジェクト)金沢21」のメンバーは4月



4



5



6

1. 「みかん電鉄」社員研修の様子
2. 「ドライバーリーダー」活動の様子
3. 「HOP金沢21」のコンサート風景
4. 「金沢不満合唱団」のライブ風景
5. 「局地限定放送局TAMA」インタビュー風景
6. 「アートモール・スクール・プロジェクト」記録展示

に苗を植えて育て、10月実を収穫して楽器を作り、翌3月に市内瓢箪町公民館と美術館でコンサートを開催した。³

《金沢不満合唱団》

「不満合唱団(Complaints Choirs)」は身近な不満の言葉を集めて作った歌詞に明るいメロディをのせて歌う合唱団を作るというプロジェクト型の作品。テレルヴォ・カレイネンとオリヴァー＝コッチャ・カレイネンが2005年に開始して世界に広がる。本展で日本初の不満合唱団を結成し、全7回のワークショップを通して曲作りと合唱の練習を行い、8月にライブを開いた。(講師：楽曲＝巻達彦、歌唱指導・指揮＝Genie)⁴

牛嶋均《ころがるさきの玉ころがる玉のさき》

黄色い鉄製の大きな玉を転がして出かけた先で、出会う人たちとともにいろいろなことをして過ごす作品。今回「局地限定放送局TAMA」と題して、広場で玉を基地にFMラジオ局を開き、館内で聴けるラジオ番組作りを行った。⁵

2009年度の運営を通しては下記のような点が見られた。まず、様々なテーマや素材を扱う作品が同時進行した結果、お互いが趣味や趣向の異なるメンバーにより多彩なグループが形成された。ここで大きな特徴として、作品が扱う題材について経験や技能を持つ人々が集まるのではなく、興味を持った未経験者が多く集まりながら、経験者や作家・講師とともに育っていく、という姿が目立って見られた。作品との出会いをきっかけに、メンバーにとっての新たなチャレンジや人々との出会いが生まれた。また、いくつかの作品にまたがって参加するメンバーも複数見られ、美術館での作品鑑賞の多様さもより広がったといえよう。これらの活動の様子は、プロジェクトとしてまとめてキッズスタジオで記録写真とともに掲示して報告した。⁶

一方で、各メンバーの募集や来館者への作品の案内などについては、時期が進み作品の進行が分かると告知が次第に分散しがちになる面が見られた。今後はプロジェクトとしてまとめた形で、活動をよりわかりやすく魅力的に伝えたい。

解説シートと音声ガイド

当館での展覧会に合わせた基本的な教育普及ツールとして、コレクション展を中心に「解説シート」や「音声ガイド」等を制作している。

音声ガイドについては館内で再生端末を有料で貸し出す形で運用した(200円/回)。コレクション作品やコミッションワークに関してはその年の展覧会だけでなく将来的にも繰り返し鑑賞されるものであるから、音声ガイド等のツールも長期的な活用を考慮して、アーカイブ事業との連携も視野に入れて制作している。「日比野克彦アートプロジェクト」に関する音声ガイドの制作時には、作家である日比野自身がナレーションを行い、作品について語った。^{*1}

(木村健/エディケーター)

*1. 2007-2009年度のその他のナレーション：北まち子